

第9回大会、盛会のうちに終了！

★日 時 2009年6月6日

★会 場 明治学院大学白金キャンパス
アートホール・チャペル

★プログラム

10:30-12:00 基調講演・・・樋口隆一氏(明治学院大学教授)

12:00-12:30 総会

12:30-13:45 昼食、懇談会

14:00-16:30 講演 佐藤望氏、加藤拓未氏、久保田慶一氏

17:00- 明治学院バッハアカデミーによる特別演奏会

キリスト教礼拝音楽学会 第9回大会報告

古澤 嘉生

2001年に発足した<キリスト教礼拝音楽学会>は今年で9年目を迎え、第9回大会が、去る6月6日(土)東京・明治学院大学白金キャンパスで開催されました。「北ドイツのプロテスタント音楽―バッハ以降を中心に」が今回のテーマでした。多様なキリスト教礼拝音楽の中でも<北ドイツ・プロテスタント音楽+バッハ>でしたから、みな集中してレクチャーに傾聴しました。総合司会は伊東辰彦氏(国際基督教大学)により、先ず金澤正剛会長の挨拶をもって始まりました。

今回の基調講演は樋口隆一氏(明治学院大学)により「バッハ復活と19世紀ドイツ・プロテスタント音楽」と題して行われました。オルガン音楽とコラールのみならず、オラトリオ、受難曲の演奏も、教会の重要な要素になっていますが、これは自明なことではなく、バッハの没後は彼の音楽は一旦衰退し、19世紀のいわゆる<バッハ復活運動>とともに見直され、更に20世紀を通して教会音楽の中心的位置を獲得したのだとして、その歩みをたどり、[18世紀後半] 死後、

一般には忘れられていたバッハの音楽は、彼の息子・弟子たちにより保持されたが、カンタータがバロック的な歌詞の故に理解されず、マタイ受難曲も難解で当時の人には重い作品と映っていたことなど、またハンブルクではカントルの職が廃止され、それは他の都市にも拡がっていったこと、時が古典派の傾向に移行する時代でもあり、必然的な流れであったのでしょうか。[19世紀の初期] 先ずフォルケルの『バッハ伝』の出版に始まり、<ベルリン・ジングアカデミー>の創設、1829年メンデルスゾーンによる『マタイ受難曲』の復活上演により、そのブームが起こったこと、[19世紀後半] 1850年『(旧) バッハ全集』の刊行に始まり、シュピッタがベルリンで『バッハ』を出版、ブラームスが、教会音楽様式で深い宗教的感情を表現し、バッハのカンタータ等を上演する。[20世紀前半] に入り<新バッハ協会>の設立、シュピッタが描いた<バッハ音楽とプロテスタント教会音楽の結合>の理想の実現へと向かう。1930年代の国家社会主義政権ナチ

スとの関係。〔第2次世界大戦後〕は『新バッハ全集』の刊行が、2006年に完成する。樋口教授のバッハのcantataとご自身の関わりや『新全集』編集に参画されたこと等のお話は、大変に興味深く、有意義で貴重な基調講演を結ばれました。その後、学会総会が昼食前に開催されました。

午後は大会テーマに関連ある研究を積み重ねてきておられる3人の研究者によるレクチャーがありました。〔講演Ⅰ〕佐藤望氏（慶応義塾大学教授）「バッハ時代のドイツ・プロテスタント教会における音楽をめぐる神学論争について」神学論の紹介が「礼拝音楽学会」に導入されることは、極めて妥当、かつ適切な在り方と思われます。「17世紀後半より18世紀初頭にかけて、ドイツ・プロテスタント地域では、教会音楽の意義、その有効性・危険性に関して、激しい神学的論争が繰り返されている。この論争はこの時代広範に影響を与えてきた敬虔主義の運動と密接に関わっている。」とレジュメにあり、敬虔主義の指導者シュペナーとフランクを上げ、音楽の内面化、個人化、主観化された詩的、音楽的表現を導く、ことなどを語り、音楽理論と神学の項では、マッテゾンやヴェルクマイスターなどの名前が上げられていました。

〔講演Ⅱ〕加藤拓未氏（NHK-FM「バロックの森」解説者、明治学院大学大学院）「職務と芸術的主張の狭間で—ハンブルクの音楽監督およびcantorとしてのテレマン」バッハと同時代で、当時もっとも勝れた音楽家の一人、その人気はバッハに優るほどであったと言われる、テレマンの研究者である加藤氏は、「…ハンブルク市の音楽監督兼cantorとして、基本的に毎週、当地の主要5教会に礼拝音楽を提供していた。その演奏を担当したのは、当初、テレマンの勤務先であるヨハネウム学校の生徒たちであったが、その水準はcantorの理想には程遠く、そのために、彼は、演奏水準の改善に乗りだしてゆく。」加藤氏はテレマンの礼拝音楽における演奏の実態について研究、考察をし、配布資料には、彼の前任・後任者140年に亘る時代の5人の名前と年代に始まり、器楽奏者の数の比較、

声楽陣についての考察などを示す実証的な研究であり、当時の実態を幾分でも垣間見ることが出来る、興味深いプレゼンテーションでした。

〔講演Ⅲ〕久保田慶一氏（東京学芸大学教授）、〈カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ研究〉の第一人者である同氏の講演題は「cantorという仕事について—C. P. E. バッハ（1714 - 1788）と Chr. シューナー（1953 -）—」誰しも関心を持つ、ドイツの教会の〈cantorという仕事〉に関して、レジュメには、「ハンブルクのcantor職は、C. P. E. バッハとその後任であった Chr. シューナーでもって廃止される。しかし、第2次大戦後、ハンブルクでは再びcantor職が復活し、今日に至っている。」とあり、今現在はハンブルクに5人のcantorがいる、として彼らについての紹介が記されており、その中の聖ミヒャエリス教会のクリストファ・シューナーとのインタビューの調査結果を紹介して、18世紀と21世紀のcantorの仕事について比較する、といった極めて興味深いユニークなレクチャーでした。5人のcantorたちは、自分たちをcantorとは思わず、オルガニストであり、「cantorというのは小さな教会で合唱指揮やオルガンを弾いたりしている人だ」と考えている由です。

〈総会について〉 午前中総会—第1号議案=2008年度事業報告及び2008年度収支決算の件=承認。第2号議案=2009年度事業計画及び2009年度収支予算案の件=承認。第3号議案=会則改正の件=承認可決。（改正案は、総会成立に必要な人数確保が目的で、総会の会員の半数以上であったものを4分の1以上に改正。）

〈特別演奏〉 学会終了後、明治学院バッハ・アカデミー（樋口隆一芸術監督指揮）による「バッハ以降のドイツ・プロテスタント音楽」の見事な素晴らしい演奏があり、充実した、有意義で実り多き今年度の大会を終了致しました。

（西南学院大学名誉教授・当学会初代会長）

青山聖三一教会聖堂のブループリント

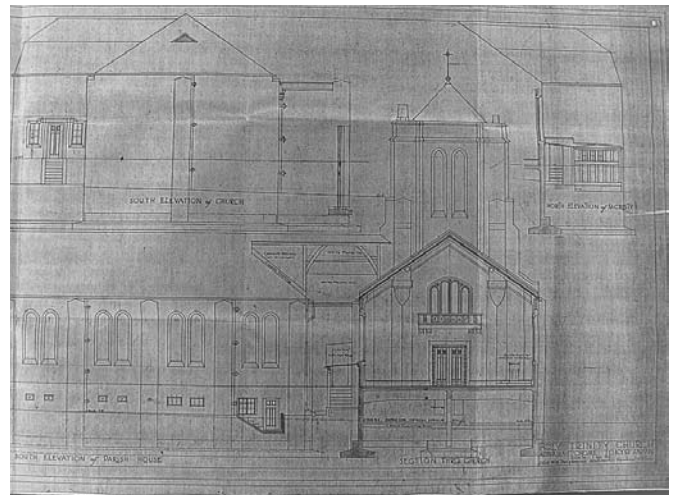
赤井 励

戦前、東京青山一丁目にあった日本聖公会の青山聖三一教会については、オルガニストの林佑子先生のように今も記憶をお持ちの方がおられる。そしてこの教会が重要なのは、当時の日本では珍しいパイプオルガンを備え、木岡英三郎がオルガン披露を行っていた点である。エドワード・ガントレットが教会音楽を担当していたことも記録されている。米軍の爆撃で壊滅・移転した教会なのだが、戦前の東京を知るバッハ研究会の故原田一郎氏が著書中で「カナダ製でフランス系の音がするオルガンがあった」と書いておられ、調べたところ、それはカサヴァン兄弟社製であった。カナダは戦災に遭っていないため、製造番号順に資料がきっちり揃っており、同社のご協力のおかげで1995年出版の拙著にもこのオルガンのストップリストと写真、ガントレットによるオルガン検査証明書まで掲載できたのは有り難かった。お礼に資料の出所、つまりカサヴァン兄弟社名とご担当者のお名前を明記した拙著を送ったのはもちろんである。

ところで、この資料請求時に送っていただいた資料の中に、未だに発表していないものがある。それは聖三一教会の1/50縮尺建築図面3枚で、設計者はオランダ系と思われるJ.Van Wie Bergaminiである。当時、バーガミニは中国の英国租界、漢口（現在の湖北省武漢市）におり、図面にはHankow在住の建築家、1926年2月27日と書いてある。今から約83年前の仕事であった。当時の東京は関東大震災後の建築ブームで設計者が足りなかった。私が所有する日本聖公会の『古今聖歌集』1924年版も上海で印刷されたものであり、中国の聖公会が様々な拠点、分野で日本聖公会復興に協力していたことが理解される。

これらの図面はそれぞれ寸法が1メートルもあり、白線が浮き出たブループリントの体裁であるため、縮小白黒反転しなくてはならず、印刷にはひと手間かかる。しかし内装はホワイト・プラスター・フィニッシュ、オルガンロフトの寸法は…といった情報も書かれたこの建築図面があれば、聖堂内音響や礼拝の雰囲気がほぼ復元できるわけで、日本のキリスト教音楽史に於いてかなり重要な資料である。音響学、キリスト教史や建築史、郷土史の立場からも色々引用して使える資料と思われる。ドイツの人たちならば、このような図面から教会を（東京駅と同じく）戦前の「爆撃前の」姿に戻すであろう。それが先人たちの築いた歴史を敬う方法の一つという考え方もあると思うのだが。

（当学会理事、日本リードオルガン協会会長）



★2009年度総会報告

- 第1号議案 2008年度事業報告及び2008年度収支決算の件
第2号議案 2009年度事業計画及び2009年度収支予算案の件
第3号議案 会則改正案の件

現行会則

第24条 総会の議決

議会の議決は、半数以上(委任状含む)の会員が出席して、その議決権の過半数でこれを決める。可否同数の場合は、議長がこれを決める。但し、当該議事についてあらかじめ書面をもって意思を表示した会員は、出席会員とみなす。

改正案

上記第9条を以下のとおり、改正する。

第24条 総会の議決

総会は会員の1/4以上の出席(委任状を含む)によって成立し、総会の議決は、総会出席正会員の過半数による。

第1号議案、第2号議案、第3号議案いずれも、挙手による採決により、賛成多数で承認。

★役員会報告

①日 時：2009年5月24日(日)14:00-17:00

場 所：明治学院150年史編集室

出席者：伊東、塩谷、手代木

議 題：大会の最終準備

学会誌・ニュースレター刊行の報告

2009-2011年役員選挙の開票(有効投票数30)

手代木俊一(30) 佐々木しのぶ(25) 金澤正剛(22) 新垣壬敏(18) 伊東辰彦(17) E.ヘンゼラー(13) 塩谷栄二(11) 那須輝彦(9) 植木紀夫(8) 赤井励(7)

以上10名を役員として承認。

②日 時：2009年7月28日(火) 13:30-15:30

場 所：東京芸術劇場5F 喫茶店

出席者：赤井、伊東、金澤、佐々木、塩谷、手代木、那須

議 題：大会の会計報告、反省等

学会誌、ニュースレター

第10回大会について

③日 時：2009年9月29日(火) 11:00-13:30

場 所：東京芸術劇場5F 喫茶店

出席者：赤井、金澤、塩谷、手代木、那須

議 題：セミナー企画

第10回大会について

★学会誌発行予定

第9号 学会誌……4月半ば刊行予定

内容●巻頭言……新垣壬敏

●論 文……手代木俊一

●書 評……吉田幸弘

『聖書に見られる賛美歌の源泉』 神谷聰子著

●書 評……佐々木悠

『メシアン創造のクレド』

アルムート・レスラー著 吉田幸弘訳

●書 評……塩谷栄二

『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』 宮崎光著

●第9回大会プログラム・報告……伊東辰彦

*別冊 『日本の讃美歌・聖歌研究書誌2009』手代木俊一著を同時発行予定

★第10回大会予定

日 時：2010年5月29日(土)-5月30日(日)

会 場：日本キリスト教団広島流川教会、エリザベト音楽大学

主 題：「礼拝における実践」

※ミニコンサート、見学会(世界平和記念聖堂、原爆記念館、原爆ドーム等)も企画

★新入会員

仁平 利三(東京)

★新刊案内

●『聖書に見られる賛美歌の源泉』 神谷聰子著

いのちのことば社 2008年7月

●『メシアン創造のクレド』 アルムート・レスラー著／

吉田幸弘訳

春秋社 2008年10月

●CD『いかに幸いな人『讃美歌21』の歌詞によるジュネーブ詩編歌』

水野隆一指揮

関西学院聖歌隊

コウベレックス 2009年4月

●CD『そよ風のリードオルガン』

中村証二演奏

コウベレックス 2009年1月

★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつもご支援をいただき感謝申し上げます。**2009年度の会費**をまだ納入していない方は、ぜひ下記の口座にお振込みくださいますようお願い申し上げます。2007年総会で決定された会則改正により、2008年度分からの会費は変更になっております。

キリスト教礼拝音楽学会 東北地区部会

郵便振替口座 02240-3-46335

入会金：3,000円(入会時のみ)

年会費：正 会 員 6,000円(2007年度までの分は5,000円)

準 会 員 3,000円

賛助会員 20,000円

●振込用紙には* ____年度／正・準・賛助会員／会費の金額を必ず明記の上、ご送金ください。

●住所変更等も、お知らせください。

●会費納入についてご不明なことがございましたら、下記にご連絡をお願い申し上げます。

会計担当 佐々木しのぶ

〒980-0023 仙台市青葉区北目町6-6-1101

TEL/FAX022-262-6565 Email:sshinobuorg@ybb.ne.jp